

第2章 墓制班

墓制班概要

土居 浩

今期の墓制班では、初年次の成果を踏まえ、次なる段階としてより深い理解を目指し、各自の調査研究を進めた。初年次は各自の課題を概観し、合葬式共同墓に代表される墓・納骨堂およびその類縁施設の様々なバリエーションと、それぞれを支える「つながり」すなわち社会的紐帯のバリエーションについても、単に「新しい」のみならず、それぞれの歴史的経緯を背負った「つながり」であることを瞥見しえた。今期はそれを承けて、より深い理解を目指し、各自の課題に取り組んだ。

小谷報告「どんな墓が求められるのか～共同性の観点から」は、まさに現在における喫緊の課題そのものをタイトルに冠して、墓の現代的ニーズを検証する。まず複数の世論調査・統計調査から、前提として多死社会と同時に「墓の核家族化」が進展中だとする。そして東京都・横浜市・大阪市によるアンケート結果から、都市部（大都市）では「小規模なお墓」が志向され、それに応じて「継承を前提としない」「個別の墓石が不要」な形態＝納骨堂・集合的永代供養墓・樹木葬墓地等々が増加しており、それがここ数年、地方都市も同様の傾向にあると指摘する。具体的事例として、納骨堂や樹木葬墓地も「永代供養墓」と一括して称される実態（広島市・某民間霊園）や、「安穏廟」「桜葬墓地」などかつて固有名とともにあったコンセプトを一部で継承しつつも一線を画す様相（大分市・妙瑞寺）が、報告される。

宮澤報告「新宗教団体における樹木葬墓地の運営―白光真宏会「富士聖地自然霊園」の事例から―」は、その副題が示すとおり、白光真宏会による樹木葬墓地「富士聖地自然霊園」を取り上げ、検討する。宮澤が「はじめに」で明言するように、近年における樹木葬墓地のバリエーションの一事例としてのみならず、一般的な樹木葬墓地とは正反対の、「信仰を核とした強固な共同体による樹木葬墓地」を検討することで、「新たなかたちの墓をめぐる共同性についての理解」を深める試みである。2019年8月に開園されたこともあり、今回は提供する側のコンセプトを中心に検討がなされる。その検討が浮かび上がらせるのは、白光真宏会という宗教団体の歴史的経緯（＝「これまでの教えや実践」）に、いかにして樹木葬墓地のコンセプトを接合させたのか、その具体的経緯である。

小谷報告と宮澤報告は現在の、いわば〈前衛的〉事例である。たとえば初年次の報告で取り上げた事例である「ゆいまー那須」（小谷）そして「森の墓苑」（内田＝宮澤）は共に、新たな墓（の類縁施設）のコンセプトとして、興味深い事例であった。それに対して今回の事例は、〈前衛的〉バリエーションの一つとして把握するのみならず、その受容過程あるいは一般化過程として理解することも、可能となる事例である。その可能性の意義は、次に紹介する問芝報告を踏まえることで、より明瞭となる。

問芝報告「戦後の都市部における墓地移転の諸相」は、小谷報告・宮澤報告が（暗黙の）前提としている従来の墓制が、それ以前の墓制から大きく再編（改変）された戦後日本の墓地移転について、戦災復興期における事例として東京都・名古屋市・津市を、やや遅れて昭和30年代の事例として仙台市を取り上げ、検討する。いずれも、かつての寺院境内墓地から、納骨堂・特設墓地への転向（東京都）、ある

いは郊外型公園墓地への移転（名古屋市・津市・仙台市）と、墓制に大きな改変が生じた。納骨堂・特設墓地・郊外型公園墓地いずれも当時は新奇な墓制であり、同時代的には大きな抵抗（感）があったと伝えられるが、その後の経緯をみれば、必ずしも負の影響とはいえないと指摘する。登場した当時は新奇な墓制であった納骨堂・特設墓地・郊外型公園墓地も「数十年を経て社会に違和感なく定着してきた」ことを踏まえ、「今日の樹木葬や自動搬送式納骨堂」の将来における評価についても、楽観的展望を示す。

続く鈴木報告「昭和初期の「永代供養墓」構想—田中智學と細野雲外—」は、鈴木が「墓地経営者の責任におき、その管理と『死者』弔いの永続性が担保された墓」と定義する「永代供養墓」、換言すると〈墓の管理の永続性〉と〈死者の弔いの永続性〉が同時に担保されている施設の淵源を、昭和初期にさかのぼり検討する。鈴木によればこの「永代供養墓」は、2000年前後の世紀転換期から建立が顕著に見られるようになるが、用語として存在していなかった昭和初期においても、類似の構想は認められるという。いわば、〈前衛的〉事例の淵源を探る試みである。具体的に鈴木が取り上げ比較検討するのは、国柱会すなわち田中智學の「妙宗大霊廟」構想と、細野雲外がその著書において主張した「不滅の墳墓」構想である。現実に建立され現在まで継承されている「妙宗大霊廟」に比して、「不滅の墳墓」は現実化しなかった相違はあるが、二人とも墓が無縁化する昭和初期の同時代的問題が「直接の引き金となって」二人の構想が生み出されている、と鈴木は見る。

以上4名の報告が、〈前衛的〉墓制に注目して調査研究に取り組んだのに対し、続く森・土居の各報告は、いわば〈伝統的〉墓制の法的・社会的規範の現在について、より深い理解を試みる取り組みである。

森報告「トリーア市の埋葬と墓地について—日本との比較を中心に（概略）—」は、日本との比較を念頭に置きつつ、ドイツのトリーア市における埋葬・墓地の現状を紹介する。墓地をめぐるヨーロッパと日本との違いを、主に墓地法の歴史を紐解きながら確認した上で、トリーア市の墓地条例が丁寧に検討される。墓制の日欧比較は、森がこれまで精力的に取り組んできたテーマであるが、今回は特にReihengräber（列墓所）について、その歴史的・思想的背景も含めた検討に着手した点が、注目される。森は以前の自身による訳語（Reichengrab「個人墓」／Wahrgrab「家族墓」）を批判的に再検討し、その歴史的展開を考慮して、新たにReichengrab「列墓」／Wahrgrab「選択墓」と訳出する。訳語の刷新により「家族」から連想される日本的常識が振り払われ、日欧の〈伝統的〉墓制における思想的背景の差異が、より明瞭に浮き彫りにされる。

土居報告「ある墓制の終焉とその後：山陰地方の一事例から」は、マスメディアどころか学術的にも取り上げることが稀となった、両墓制が終焉しつつある／した地方の現場から、そこではいかなる新たな「つながり」すなわち社会的紐帯が模索されているのかについて、考察する。いわば〈伝統的〉墓制の変容が扱われる際には、それを支えた思想的・社会的背景の破綻が指摘されがちであり、実際、その通りではあるのだが、同時にその変容には、新たな社会的状況へ適応するための一つの解決策あるいは試行錯誤が反映されていることに、土居は焦点を当てている。

以上、今期の墓制班では、〈前衛的／伝統的〉形態を問わず、社会的紐帯のバリエーションとその歴史的社会的背景について、各自の課題に沿いつつより深い理解へと進めることができた。最終年次は各自さらなる深い理解へ向けて調査研究に取り組むとともに、葬送班とも連携しつつ、統合的理解へ向けて

総括を試みたい。